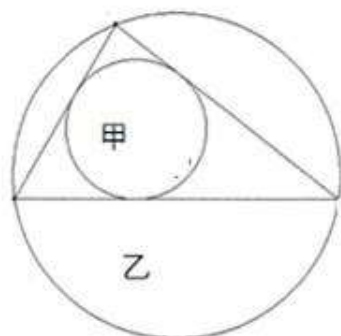
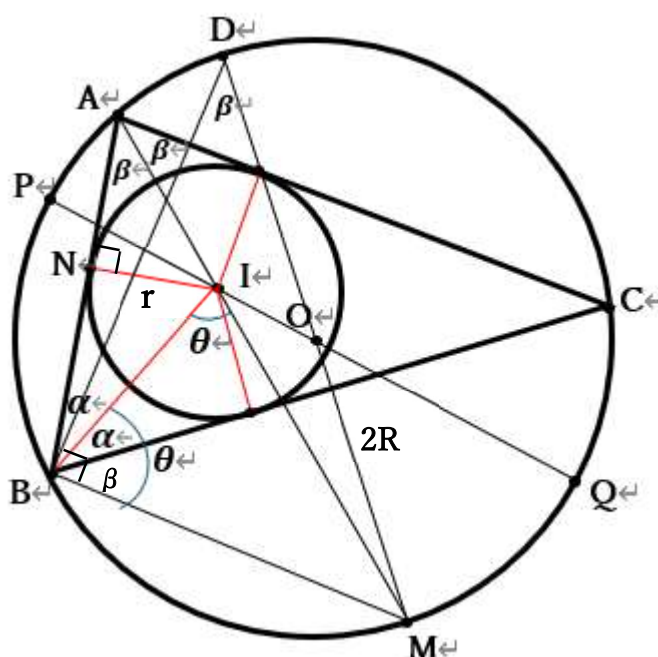


オイラー・チャップル定理



三角形に内接する甲円と外接する乙円があり
甲の半径を四寸 乙円の半径を九寸とする。
甲円乙円の中心間の距離を求めよ。



(解)

本項では、オイラー・チャップル定理を適用せずに求め、その結果をオイラー・チャップル定理を用いて得た結果と比較する。

甲円、乙円の半径をおのおのを r 、 R とする。また、甲円と乙円の中心間距離を d とする。

内接円の中心 I と外接円の中心 O を通る直線が外接円と交わる点をおのおの P, Q とする。また、点 A と内接円の中心 I を通る直線が外接円と交わる点を M とし、 M から外接円の中心 O を通り、外接円と交わる点を D とする (上図参照)。すると、方べきの定理より、

$$\begin{aligned} (PI)(IQ) &= (AI)(IM) \\ (R - d)(R + d) &= (AI)(IM) \quad \dots (1) \end{aligned}$$

と表される。

次に上図において、 $\angle BIM = \vartheta$ とすると、

$$\begin{aligned}\theta &= \angle BIM = \pi - \left(\frac{\pi}{2} - \alpha\right) - \left(\frac{\pi}{2} - \beta\right) \\ &= \pi - \frac{\pi}{2} + \alpha - \frac{\pi}{2} + \beta \\ &= \alpha + \beta\end{aligned}$$

次に、円周角に性質から、 $\angle MBC = \angle MAC = \beta$ であるから、

$$\angle MBI = \alpha + \beta = \vartheta$$

となり、三角形 BMI は二等辺三角形となる。従って、 $BM = IM$ となる。三角形 ANI と三角形 BDM は相似であるから、

$$\frac{(NI)}{(AI)} = \frac{(BM)}{(DM)} = \frac{(IM)}{(DM)} \quad \dots (2)$$

となる。ここで、図に示されるように $(NI) = r$, $(DM) = 2R$ であるから、

$$\frac{r}{(AI)} = \frac{(IM)}{2R} \quad \dots (3)$$

(3)式を(1)式に代入する。

$$(R - d)(R + d) = (AI)(IM) = (2R)(r) \quad \dots (4)$$

を得る。(4)式を d について解くと、

$$d = \sqrt{R^2 - 2Rr} \quad (\because d < 0 \text{は不適}) \quad \dots (5)$$

となる。題意より、 $R=9$ 寸、 $r=4$ 寸であるから、甲円と乙円の中心間距離は、

$$d = \sqrt{9^2 - 2 \cdot 9 \cdot 4} = 3 \text{ 寸}$$

となる。

(追) オイラー・チャップル定理の形式

(5)式が次式に示されるオイラー・チャップル定理の公式と一致するか確認する。
以下にオイラー・チャップル定理の式を示す。

$$\frac{1}{R - d} + \frac{1}{R + d} = \frac{1}{r}$$

はじめに(5)式の $[(R - d)(R + d) = 2Rr]$ の逆数を取る。

$$\frac{1}{(R - d)(R + d)} = \frac{1}{2Rr}$$
$$\frac{2R}{(R - d)(R + d)} = \frac{1}{r}$$

上式左辺を部分分数にとると、

$$\frac{1}{R - d} + \frac{1}{R + d} = \frac{1}{r}$$

となる。従って、(5)式はオイラー・チャップル定理の式と同一である。

以上